

土佐日記の諷刺と諧謔

— 醒めた知性人の嘆き —

姜 泰 國*

目 次

- I. 序 論
- II. 本 論
 - 1. 貫之という人
 - 2. 後學者たちの見解
 - 3. 諧謔性
 - 4. 諷刺性
 - 5. 日記に表われる笑いと諷刺
- III. 結 論

I. 序 論

日記は日本の古代から貴族階級の男性たちが宮中行事とか公の儀式などを忘れないために具注曆ふうの備忘のために漢文で記録したもので、実用性が強く、文學性に乏しいものであった。貫之が女性假託にしてかな文字で土佐日記を書きはじめたから日記は文學として昇華したのである。この影響を受けて、女性の手になる日記文學がさかんに現われ平安女流日記文學の花をもさかせるようになった。これらの日記文學は物語より現實的で、また自照性も強く、作者の内面生活の眞實の記録となっていて、文學的に高い價值を持っている。

土佐日記は貫之が土佐守の任を終えて京に歸るまでの55日間の旅の記録や體驗そして醒めた意識で見つめて感じたことをかなで書き記した日記である。あえてかなを使い、女性に假託して書いているので、自己の心情を自由気ままにこまかく表現している。文學的な結構や修辭が周到綿密に驅使され、體驗の事實を止揚した創作性、虚構性が付與されているのである。従って土佐日記は日本における最初の日記文學であるとともに、本格的なかな文學の先驅をなしており、その意義は大きいものと

* 인문대학 日語日文學科(Dept. of Japanese Language & Literature, Cheju Univ., Cheju-do, 690-756, Korea)

して日本國文學界においては高く評價されているものである。

筆者は以上の点を重視して日本古典文學を手つけるにあたって、先づこの土佐日記を踏まえてから發展を遂げて見ようと試みてきたが小さい本でありながらも、その内容の多様性に目がまわる思いをしているのが率直な心情である。まるでたまねぎをむいているような気持ちである。これでもかこれでもかと追求してみてもつきない豊富で多様な主題におつかってまた新たまって違ったアングルで讀みなおす次第である。

本稿ではこの日記の第二主題であろう社會諷刺および諧謔性をからめて考察してみようと思う。まず、貫之という人を定立させて、どういう知性人であったか正直で民衆の杖である彼の人間性を浮きぼりにして、そのさめた目から當時の社會を見、さえた頭腦でどう評價しているかを見つめてみたい。第二に土佐日記を後學者たちはどう評價しているか、その見方を調べてみたい。第三に日記に表われる諷刺性と諧謔性を抽出してみたい。しまいには日記の内容にふれて味わいながら考察してみたいと思うものである。

II. 本 論

1. 貫之という人

貫之という人物をじっくり眺めると、彼の一生を貫いて胸深く抱いていたのは氏族意識と儒教的倫理からくる根強い人間不信の念であると言えるのである。紀氏は天孫系ではなく、木の國の國造の家柄である。日本人固有の祖先崇拜の精神構造と、土地と領民との上に成り立つ經濟構造とで、その氏族意識が強かったのである¹⁾。平安貴族の教養を漢學一邊倒になっていた當時の儒教倫理で容易に氏族意識と結びついて、彼の人生觀の基盤になっていたものと考えられる。

彼の名前からしても、貫之は「論語」の「吾道一以貫之」²⁾「予一貫之」³⁾から撰字してしる。彼は名前の如く、生涯律令官として士大夫の通を歩み廉直恪勤を旨として生き抜いていたのである。幼時の彼は外伯父紀有常の口を通して紀氏衰運の慘たんたる昔話を聞かされて成長した。彼の生涯に著しい家の名譽を重んじる氏族意識と榮枯ままならない世相人情への不信の念は幼時の時期に彼の心に深く刻みこまれたものであると理解される。

幼時の周邊には惟喬親王を中心とするアンチ攝關藤原氏のグループの業平、敏行、有常という當代屈指の歌人グループがあった。彼の歌人、文學家への開眼がその時期に形成されたことも理解できる⁴⁾。血筋から見ても紀氏一門に數多い漢學者や能書家、勤直勵精の良吏を輩出するなどの影響を受

1) 萩谷朴「貫之的なるもの」(「國文學解釋鑑賞2月號」, 至文堂, 1979年) p. 6.

2) 貝塚茂樹「孔子と孟子」(「里仁篇」, 中央公論社, 1967年) p. 115.

3) 貝塚茂樹「孔子と孟子」(「衛靈公篇」, 中央公論社, 1967年) p. 304.

4) 久松潛一外二人「日本文學史 中古」, 至文堂, 1971年, p. 261.

けて貫之の人間形成に一つの要因であると思われる。20歳ごろ、宇多天皇は親政の復活と攝關藤原氏の抑壓に力を注いだ。特に伝統的な和歌の國風を復興することによって、男子貴族の知識層にまで和歌の詠作を急速に奨励することになった。従って和歌再唱の氣運が上下にみなぎっていたので、彼も青年客氣で人材登庸の機会をつかんで紀氏復興を夢見るのであった。夢はままならず宇多天皇の讓位によって政局は一轉し、醍醐天皇は少壯氣鋭の實力者藤原時平と手を結ぶことになった。従って貫之をささえていた實力者たちは次々と除去されるようになった。

このような現實の厳しさを眼のあたりにして少年のころから腦裏に刻みこまれていた紀氏衰退の歴史がまざまざと記憶の中によみがえり紀氏回復の夢はむなしく崩れ去るのである。厳しい倫理觀に立つ貫之は藤原氏の有力者に接近して格別を計ってもらうよう頼むことばできなかった。ひたすら醍醐新政に隨順し、和歌文學の世界で身を立てることしか残された氏族の名譽を輝かす唯一の手段となった。それからの生涯は全く忠實にその方針を貫き満足できる成果をあげたと言えよう。その成果とは「古今和歌集」の撰者になったことである。彼の理論的な知識、和文の文章力、假名書道の能筆、そして事務的な組織力と着實な根氣とは完全にこの編集の中核としての役割を満足し、名實ともに古今和歌集の編さんの功績を彼自身のものとしたのである。

文學上の業績と名聲とが輝しいものであったのにくらべると、官界においてははなはた振わないものであった。土佐守の任期を終えて、歸京その後五年を経て、玄蕃頭になっており、さらに3年経て70歳過ぎてからやっと従五位上に叙せられている。従五位下から實に26年ぶりの昇叙であった⁵⁾。60余歳になって、初めて土佐守に任ぜられた官吏として祖先の名を辱めないだけ尊敬を一身に集めるよう廉直格勤の實績を残して歸京した。

七十歳にして政界に孤立無援の老後を迎えるようになった。賄賂を贈って賣官するような融通はきかない。頭は下げない。清貧を誇りとする彼には社會が時々ゆがんで見えたのであろう。それが土佐日記に嘆きとして現われるのである。地方官の綱紀の亂れを指摘したりしながら醒めた知性人の意識はさえていた。にごっていないその意識は透明な悲しみとして彼に迫るのである。

2. 後學者の見解

池田龜鑑⁶⁾は「日記はどのようにして文學たりうるか」で次のように述べている。日記はあくまでも事實の記録であって、架構の作り物語りではないということである。しかしこうはしても、日記は決して機械のみなしえられる純粹に客觀的な記録ではなく執筆主體を通し、主觀の理想や情念の洗禮をうけた、いわば個性の陰えいの濃いものである。したがって憧憬、讚美、批判、自省、告白などの照明がそれぞれ事實を豊かに、花やかに、つましく彩るのが普通である。日記文學においては、事象を含めて、表現そのものの深い自立的價値が問題になってくるのである。筆録者は單なる筆録者から一應その

位置を離れて作者として、文學の次元の住人として、われわれの前に立ちあらわれてくるのであると、單純な日記と文學性との相違を明して、土佐日記は作者自身が女性になりきって、實録的でありながら虚構的な面を見せている。何ぜそうしたか、その要はいろいろあるが社會を諷刺するためにもそうしていることがいま見られる主題性があるので日本文學であると説いている。

三谷氏⁷⁾は土佐日記は單に實録性の日記というより物語的創作意圖をもっているが、何らかの別の創作意圖をもって身分をかくしている。従って實録的な日記というものから一步もラチ外に出ている。おそらく自己を語り、讀者を豫想した書きぶりということが認められて、文學的意圖で書いていると説いている。玉上氏⁸⁾は土佐日記は作者の目が多少作者の周邊に向いて日なみの形態が歪曲される原因の一つは主情性の多寡によるものと思られる。このように主觀の強さは日記を隨筆あるいは私小説化する方向を誘致し、自照性、告白性の尊重に落ちつくことになってしまうと慎重に日記文學についてけねんしている。富士谷御杖は貫之の著作動機を秋成⁹⁾らの言う亡兒への愛惜の情であるとししないで土佐守に對する憤マンたと考えた¹⁰⁾。なお御杖¹¹⁾は「土佐の任のいきとおりはおもるままにいひせられたと、いささかあらはるところ」がなかったので、朝廷からのとがめも受けていない。これは日記の文章が「倒語の妙を盡」していたからであると見解を論じ、彼獨特の直言倒語の説をもってこの日記が比喩的表現にすぐれていると解釋している。さらに貫之は風俗の移り變り激しい世の中を嘆いたと指摘している。その嘆きは「圓を矯め外を飾る薄情に赴く」世になったし、朝廷の人事も「庸人おもく用ひられ人傑その任かろく、或は功勞をつめる人除目におくれ無功の人すすめるたぐひ多かりしなる」ありさまである。そのために「是其人人の愁のみならず、人材世にかくれ志有もの退かむとするは、皆朝廷の不幸にして天下人民の安からざる基なり」と貫之は嘆いていると説いている。

萩谷氏は(イ)日記文學としての形態、(ロ)紀行文學としての素材、(ハ)戯曲的な性格に立つ構成、(ニ)歌論書としての第一主題、(ホ)諷諭警世の書としての第二主題、(ヘ)誹諧滑稽の文學としての遊び、(ト)亡兒追憶の心やり、(チ)假名文の普及、(リ)民謠の蒐集、と土佐日記の性格を分類定義づけている¹²⁾。氏はさらに、これだけ創作意圖が多岐にわたっていれば、全體として統一のない作品であると非難されるのも無理はないだろう。土佐から京までの旅日記という、時間的空間的な約束によって辛うじて一つにまとまっているに過ぎないといわれても過言ではないと論じ筆者を女性と假託

5) 丸尾芳男「土佐日記」、旺文社、1978年、p. 11.

6) 池田龜鑑「日記文學」(「國文學 解釋と鑑賞1月號」、至文堂、1974年) p. 2, p. 4.

7) 三谷榮一「土佐日記譯注」、角川文庫、1981年、p. 95.

8) 玉上琢彌「平安日記と私家集との關係交渉」(「國文學解釋と鑑賞ふ月號」、至文堂、1961年) p. 21.

9) 「秋成自筆本 土佐日記」で「此の日記のなれる故い、貫之土佐の國の任みちて歸るべき年にいとなかしくせし子の病して死たりしをねあかすなけきをしまれたるか」と上田秋成がいうくりに對しての評である。

10) 秋山虔外 3人「土佐日記の研究史通觀」(「國語國文學研究史 大成5」、三省堂、1978年) p. 20.

11) 富士谷御杖「土佐日記燈」(「國語國文學研究史 大成5」、三省堂、1978年) p. 45, p. 48.

12) 萩谷朴「日記文學と和歌」(「國文學解釋と鑑賞1月號」、至文堂、1974年) p. 27.

し、主人公貫之を多数の役柄分身し、自作の和歌を数人に分擔して発表している。このような虚構が日記の本質である實録性と背反するものであることは言うまでもない。それは虚構と笑いと涙の交錯した韜晦は諷刺、警世の文學を行間に秘めていたからであると説いている。そして、貫之がくどいまでに清廉節儉は自己を主張しているのはそのうらはらには、背任横領のやからが多かったのを諷刺したからであろう。當時地方經濟の亂と各地で起った兵亂は國司が不正に私財をこやしていたのが一因になっている。貫之が日記の中で、分身があらわれたり、かくれたりして、とらわれにくく、悲哀と喜びとか相まじっているのは、作者の心情を汲みにくくして、諷刺を通じて警世の深い意がかくれている。このためにも女性假託がつごうがよかったのであると述べている。

3. 諧謔性

貫之は主知的な合理主義者であり、長い人生経験と文學活動とか透徹した歴史観によって社會で起るいろんな問題に對して批判的な人間であったと考えられる。彼はすぐれた批判の持主であった。その批判精神はおそらく若さで撰者代表となった感激と責任感に結びついて明確な批評意識が生じ次第に批判性を形成したと思われる。常にアウト・サイダーの立場から世間を眺める彼の目には悲しく嘆かわしい實相しか寫らなかつたに違いない。その目は土佐日記に見る精細な風景描寫は年老いても視力は衰えなかつたとしか見えない。従つてもっとも鋭敏な視覺の持主であり、ものごとがよく見えるのでいやなものまで見ないわけにはいかなかつたろう。

和歌においても彼なりの批評の基準があつた。和歌の條件として「花實相兼」を説いている。「其實皆落。其花孤濼」¹³⁾と「眞名序」で述べている。花は當時の和歌に遍滿している風潮を批判し、實を求めているのである。實とは表面的な花に對して、表面に表われない内容をいう。心情のありのまま述べるのではなく、趣向をオブラートに包んで智巧的に表現することである。彼は土佐日記を書くにあたって批判というものは直接的な非難攻撃よりも間接的諷刺がより多くの効果を擧げられるのであり、また諷刺はさらに諧謔とともにより廣く受け入れられるものであることを見通していたと思われる。

土佐日記には二種の笑いがある。解放の笑いといふ諷刺の笑いである。この二種は區別されるものではなくたがいに通じ合っている。解放の笑いは性に關するものである。社會から抑壓されている人間は、性を話題にすることで解放されることになる。性を話題にすること自體が社會に對する批判にもなるわけである。解放されることからくる笑いをともなうため、軽い冗談のなかにまぎれて許されるのである。許されるという点では諷刺も同じである。笑いのなかにある限り社會はそれを許すのである。人人はそのような笑いによって抑壓と均衡を保っているのである。日本文學史においてそのような意味において笑いに關する作品はめつたに見當らない¹⁴⁾。土佐日記はその稀な作品の一つなのである。土佐日記シャ落や滑稽は、きわめて單純でわかりやすく表われている。

13) 小町谷照彦 譯注「古今和歌集」, 旺文社文庫, 1982年, p. 290.

14) 古橋信孝「笑いの文學, 諧謔の精神」(『國文學 解釋と鑑賞2月號所載』, 1979年)

- ① 諷刺的要素に附随して諧謔的表現に用いられている場合(12月22日, 23日, 24日, 27日, 1月元日, 9日, 2月5日, 8日, 9日, 16日)
 ② 刺笑的な興味にふれた諧謔(1月元日, 13)¹⁵⁾

萩谷氏は土佐日記の中で諧謔効果を表わしている個條を上如く分けて、よほどの解釋力がなければ、文章の眞意を洞察察知できないものである警告している。氏はさらに土佐日記を誹諧の文學と定義する論者があるほどに、この作品には地口やシャ落概念のおかしみを取り扱った諧謔的表現を用いていることが多い。しかし土佐日記における諧謔効果は作品の目的であるようも叙述の手段となっているものである。すなわち貫之は、批判は直接の攻撃よりも間接の諷刺を上策とし、諷刺は諧謔とともにあって讀者の心をとらえるものであることを心得ていた老作家であるし一面、土佐日記の諧謔的表現は、當初讀者たる年少者にも理解の容易な單純素朴なものやすくなくないからである¹⁶⁾と述べている。

澁谷孝氏¹⁷⁾は諧謔ということの意味と貫之の貴族社會および庶民に對する意識の實態を検討しながら土佐日記の一つの特色として諧謔ということが指摘されて來たが、どの様な諧謔かと云う具體的な意味については必ずしも明確でない点がある様に思われる。と述べながらも、土佐日記における諧謔というものには、貫之が自信をもって表明した古今集的認識とその發想が深く作用していたのであり、従つてそれは、近世における浮世草子等に表われたものと全く相違するものであることが分るのであると斷言している。重友毅氏¹⁸⁾は、貫之はなかば公的な立場を離れて記録し、自己暴露、自己嘲笑のうちに彼を含めた當代貴族社會一般の頹廢へと足を踏みかけている姿への批判の目があると指摘され、また、當時の貴族社會からは別の世界に住むと考えられていた庶民への親近感を持つようになったと述べられている。

貫之は土佐日記の中に確かに對人感情について憤マンの心を述べており、また庶民への心使いもしめている。問題はそのような憤マン、庶民的なものに對する接近の度合がどのようなものであったかというところにあると思われる。この問題について、正木信一氏¹⁹⁾は「土佐日記における和歌と散文」という論文で、人の心という面で考察している。たしかに日記から「心」のあるところを抜いて見ると數多くでてくる。

- 12月23日。國の人の心のつねとして今はとて見えざるを、心あるものは恥ぢずになん來ける。
 12月27日。心あるやうにははほのめく。
 12月29日。心ざしあるに似たり。
 1月 9日。この人ぞ心ざしある人なりける。
 1月20日。人の心もおなじことにやあらん。

15) 萩谷朴「土佐日記全注釋」、角川書店、1982年、p. 492。

16) 前掲書、p. 47。

17) 澁谷孝「土佐日記における和歌」(「平安朝日記1」、有精堂、1982年) p. 92。

18) 重友毅「土佐日記について」(「國語國文學研究史 大成5」、三省堂、1978年) p. 89。

19) 正木信一「土佐日記における和歌と散文」、文學1947年11月號 所載。

2月16日。(中略)預けたりつる人の心も…(中略)ひそかに心知れる人といへりける歌。

上の文章は前後省略“心”が入っている一節だけをあげたが、貫之が土佐日記を書くにあたって彼は古今集の序において「人の心」を中心として、歌を心と詞との関係において考えた跡がうかがえられる。

小西甚一氏²⁰⁾は貫之に「俳諧精神が誕生したのである」と断言してすぐ「どんなふうにと」と反問している。女性の假面をかぶったことの効果としては何よりもまづ雅びの世界との間にある距離をもてられる。きちんと秩序づけられた考え方、感じ方がある点でひょいと外してみせることができる。前土佐守という肩書きつきの貫之ではもちいられない観点が巧みにしないで自然にあたえられる。そこに俳味が生まれる。俳味とは既成の感覚で律せられない「おもしろみ」である。ひろびろとした俗に遊ぶとき、雅と同じ高さをもつ興趣にありづけられることができる。それが俳味であると自ら答えている。さらに土佐日記における好笑的傾向はけっして笑いのための笑いを笑っているのではない。むしろ深い「世の苦さ」であったろう。晩年の貫之はあまり幸せではなかったらしい。彼を不幸にしたのは、青壯年期にあれほどの理想と抱負をもってうち建てた和歌の新風に對し、彼自身が懷疑的になっていたことである。しかしその懷疑は世に容れられそうにもなかった。自分が主唱者としてうち建てた表現理念は、いまや、かえて彼の懷疑を否定し嘲笑する傲岸な存在であった。孤影寥然たる巨匠の晩年は暗たんたるものにつらなっていた。そうした晩年の憂愁をなまなましい實感として書きしるすことは、圓熟した彼の感覚とあいれなかったであろう。そこで彼は女性の假面をかぶることにした。正體を秘密のするための假面ではないからすこしぐらい「貫之」がちらちらしてもかまわない、いやむしろそれ方がおもしろい。「どこか外れている」表現、俳諧的表現は貫之の抱く暗うつさを期待どおり、かなり和らげてくれた。その上にあの笑いがまきちらされたのである。そしてその俳諧精神で世の苦さをしみじみ描いたのである²¹⁾と述べられている。

4. 諷刺性

70歳近い老齡の貫之、知性人、合理主義者となっていて、なお勤儉努力型の官吏としてさぞかしにやかましい老人であったと思われる。だが、貫之は意識してこの作品に社會諷刺的な要素を持ちこんでいるウィットにとんでいるのもいなめないのである。というのは諷刺的要素は歌論的要素に次いで数多く取り入れているのである。従って諷刺性は土佐日記の主題として考えられるのである。その要素を分けて見ると、

- (1) 國司の離任に際して、土地の人人は、世間の眼をはばかりて別れを惜しむ風習のあることを指摘したもの(12月23日)、(2)國府を離れてから遠くまで後をおって別れを惜しむ風習のあることを指摘したもの。(12月27日、28日、1月4日、9日) (3) 京都近處の住民は國司下向の際よ

20) 小西甚一「土佐日記評解」、有精堂、1978年、p. 16.

21) 前掲書 p. 26.

りも歸京の際に、とやかく歓迎の意を表して土産ものを期待する風習のあることを指摘したもの。(22月15日、16日)、(4) 貫之は極めて貧寒節約で余計な金銭財物を一切所有しない廉直の國司であったという事実を主張したもの。(12月23日、1月1日、4日、14日、2月8日)、(5) 新任の國司の赴任が遅れた結果、1月7日の敍位に漏れたことを遺憾とし、新國司に對する不満を直接間接に表明したもの。(12月24日、25日、26日、27日、1月7日) (6) 棋取りの物欲主義と彼らに利用される神威の不合理を指摘したもの。(12月27日、1月9日、14日、21日、26日、2月4日、5日)、(7) 醫師に對して好意的ならざる態度を表明したもの。(12月29日、1月1日)、(8) 世相人情の輕薄を憤ったもの。(2月6日)

とことこまかく萩谷氏はまとめている²²⁾これらすべて貫之に人間の功利的な心をいやというほど見せつけたのであった²³⁾(1)(2)(3)は當時一般の國司が私利私欲をこやし、官紀をみたしてはばからぬことを間接に諷刺したものである。たとえば地方人のよそよそしい態度は、國司との不正な情實關係の存在が世間の眼に觸れることをはばかった人情の一面をものがたるものである。都の住民のわざとらしい出迎えは國司の暴富に對する分け前の請求を裏書きするものである。こうして都と地方の雙方の住民の接觸態度によって國司の不正的な蓄財を辛辣に指摘する一面、貫之自身の清貧を強調することによって、その事実を一層照し出そうとしたのである。(5)は國司交替の遅延という官紀の弛緩を指摘したものであり、(6)は航海業者の搾取的態度を非難したものである。(7)は醫師の不正行爲を指摘するというより、幼な娘を急病で奪われたとき、醫師の怠慢とか無能に對する私憤が主となってあらわれたものであると思われる。(8)も特定の體驗的事實に對する批判だけではなく貫之が常に抱いていた人生觀を裏書きするものであった。見てきたように、(1)(2)(3)(4)(5)を通じての自己主張は彼の國司在任中に廉直を申し立て、敍位除目に對する配慮を期待したものであり、讀者である權門の子弟の父兄に對する申し文としての効果をも發揮するものとして、ひそかに期待を負わせられていたものであったと思われるのである。特に注目すべきことは、以上のような社會諷刺的要素が常に諧謔的な表現と前後して配置されていることである。再三言及するが貫之は、批判は諧謔とともにあって、より多く効果をあげられるという文章作法を充分にものごっている老練な作家であると言えよう。こういう見解は「日本文學史」²⁴⁾でも示めている。土佐日記を「シャシャ落落たる諧謔の筆の間に腐敗墮落を諷刺し、旅行者に絶對的な權威をもって監む交通業者の横暴を指彈する警世の書である」評している。さらに歌論展開、社會諷刺、自己返照の三つの主題を柱とし、さまざまな文學を生み出す源ともなって、そこにこの作品の不朽の價値があると説いている。

第三主題である社會諷刺は土佐日記の功利的効用からなる中層的な主題となる。紀氏一文の過去の歴史と現在の立場、貫之の過去の業績と現在の境遇、そして將來への見通しを通して見ると彼の深

22) 萩谷朴「土佐日記全註釋」、角川書店、1982年、p. 484.

23) 村松誠一「土佐日記、カゲロウ日記」(「土佐日記k作者s書名」、小學館、1982年) p. 12.

24) 久松藩一外 2人「日本文學史 中古」、至文堂、1981年、p. 270.

奥にあるものは根強い人間不信の念であると言えよう。その主知的で嚴かな性格からして、當時の社會に對して批判的になるのもっともである。老後の生活を賭けて、土佐守についての廉直と精勤は萬人がよく分っているもので、政界要路の人人にも分ってほしいものであった。でも思い通りにはいかずこういう社會的公憤と自己保身のためにも諷刺はおのづと出てくるものと思える。

以上のような貫之の心境を踏えて、土佐日記に現われる諷刺的なものを「日本文學史」²⁵⁾では萩谷氏のように要点を示している。

- ① 國司離任に際して土地の人人は世間の眼をはばかりて見送りに來ないという民情を指摘している。
- ② 心あるものは國府を離れてから遠出してまで送別する風習のあることを指摘し、
- ③ 彼は貧寒節儉で餘分の金錢財物を一切所有しない廉直の國司である事實を強調して當時一般の國司が私利私慾に目がくらみ、暴富をむさぼるのが常であった事實を間接的に諷刺したものがある。
- ④ 京の住民は國司の蓄財に土産ものを期待するありさまをひねったもの。
- ⑤ 新任國司の赴任が遅れた結果、正月七日の敘位にまにあわなかったことを遺憾としたもの。これは國司の新舊交替の遅延という官の紀律が弛緩しているものと非難しているものである。
- ⑥ 楯取りの物慾主義と楯取りに利用される神威の不合理さを指摘し、これを交通業者の横暴であるとその實情を告發したものである。

と掲げている。たいたい萩谷氏の分析に沿っているのに氣につかれる。土佐日記での諷刺は常に諧謔的な表現で前後として配置されているのが特徴である。貫之の批判の手法は直接的攻撃より間接的諷刺をもっている。諷刺は諧謔と共にあるとき、より多くの効果が發揮されるという点を彼は十分心得ているようにみなされる。さらに「日本文學史」を引用すれば、「地口のシャ落や矛盾概念の言語遊戯、やや刺笑的な滑稽など諧謔的表現が隨的に見られるので、これを誹諧の文學であると評する向もある²⁶⁾」と指摘しながら土佐日記における滑稽諧謔はそんなものではなくきわめて皮相的で、他の主題、ことに諷刺的テーマを効果的に生かすための補助的手段として用いられることが多いと論じている。したがって、作者心中の遊びとして讀者の理解など問題にしない高度のユーモアとしてうけとめるほかないと説いている。

桶口氏²⁷⁾は作者たる貫之が自負しつつ示し得たものはいかなるものかと問い、それは「古今集」の持つ一つの傾向との一致を見ることができるのであると答えている。氏は古今の理知の諧謔として考察している。數多いユーモアの場面の例をあげながら、この例の中に貫之自身がきわめて自負しつつ示している一種の古今の觀照法を用いている。また獨特なシャ落滑稽の論理とか思考法、そして對照によって生ずる一種美と面白さというものが大きい力を占めているのがおのづと知られると述べており、さらに、前後に對照をなものをならべることの妙味、着想と見立てすすんではそれらの美

25) 前掲書 p. 271.

26) 前掲書 p. 274.

27) 桶口寛「土佐日記における貫之の立場」(「平安日記」, 有精堂, 1982年) p. 50.

と面白さを自分の周囲からすぐと見出せられる自己の眼をまで誇らしげに示している彼のポーズはたれにもありありと見られるのであるとほめたたえている。

権門の子弟のために書かれた個人用教科書は読者の父兄である要路の権力者の眼に觸れる。執拗なまでの諷刺的敘述は土佐日記の第二の主題であるとともに、律令官人としての作者の面目が躍如としている。景樹²⁸⁾はこの日記を「三つの大事」として、「亡兒の悲しみを主とし、下に海賊の恐りをふみ、是をかすむるに全文俳諧をもてす。」と誹謗の文學と解釋している。諧謔である。しかし、單なる諧謔ではない。諧謔的表現の奥にある作者の精神、その解明が肝要である。その諧謔性は、當時のこととして外に向って行くものと内に向って行くものとの二方向がある。諷刺、皮肉などは前者であり、自虐、自嘲などは後者である。このうちで、これらは相手を痛撃する惡口の應酬という鬭争性が指摘できる。つまり堂堂と渡り會ったという屬性の鬭争性がなければならぬ。貫之には鬭争の場に監むこともなかったし、最初から敗者の意識をもっていたにちがいない。土佐日記における諧謔性は、むしろ皮肉であり自嘲であって弱者の論理である。たがこの自嘲は決して内に向って沈潜していらず、むしろこの自身を卑下することにあって読者の笑いを誘っているのであって、常に外に向っている。こうにでもし外に向ってはき口をみつけてぶつける悲しき人、その悲しみを知っていたらしい貫之であった²⁹⁾。

松原氏³⁰⁾は貫之を官人の矜持と見、12月21日、25、27日、1月17日の諸記事は新任國司に對する内部告發ともよめるいくつかの條を冷たい擲楡の表情としてうけとめている。1月2日「講師、ものさけおこせり」と敬語表現の對象とされた講師その人に對する擲楡侮蔑の表と讀むべきことばを使っていると指摘している。というのも同じ講師に12月24日には「いできせり」ともったいぶった馬鹿丁寧な最上級の尊敬語を使って貫之は痛烈な皮肉と擲楡をとばしている。貫之の意識の中では惡吏、酷吏の横行している時代のまったた中であって、廉直に責務をはたした今、知る知らぬ國人に惜しまれながら任務を終えたことに對して、深い満足と大きい自負の思いとがあつたに違いないのである。この矜持こそがいろいろな矛盾を諧謔でとばし、いろいろな誘惑をも厳しく拒絶できたのだ。自己を隠すようにしながら自分の氣質と氣質に基づく行爲や皮肉が現われている。

貫之の性質については律儀者で他からの贈り物に對して必ず返禮をし、義理を後に残さないようにするというを日記で記している。世間の人の心を歎くくせがあつて、山崎に歸ったところで、「賣り人の心をぞ知らぬ」といい、京に歸ったところで、「人の心もあれたる」というのは世の中を皮肉っているのではあるまいか³¹⁾。

土佐日記の諧謔表現が言語の對立概念の對比對照による古今的な知巧性と同じのものであるとし、諧謔に現われた指示性過多の言語表出は、多義的なことばの詩的交響による知的抒情を滅殺する過

28) 香川景樹「土佐日記創見」(『國語國文學研究史 大成5』, 三省堂, 1978年) p. 21.

29) 長谷川政春「起貫之論」, 有精堂, 1984年, p. 107, p. 110.

30) 松原輝美「土佐日記私考(中)」文學 Vol. 49, 岩波書店, 1981年, p17.

31) 西下經一「土佐日記」(『國文學解釋と鑑賞1月號』, 至文堂, 1954年) p. 37.

度の表現技巧を排して、心と言の二元論的調和をめざす古今集表現の正格からは厳しく除外された類のものであったと論じ、この誹諧的表現の一形態が諧謔としての表現価値を與えられて披露されていることは古今正調、古今的なものに近づけようとした一證である³²⁾。石原氏³³⁾は諧謔滑稽の陰にかくれた自由の精神によって自己の心情を表わし、直言と倒言との交錯のなかに諷刺的におどけて「とまれかうまれとくやりてん」と結んだが、これこそが隠された眞實を述べるための虚構である。さらに自己批判と社會批判の批評精神を讀みとり、その自己批判、凝視が私小説風のカゲロウ日記をへて、紫式部日記へ達し、社會批判の側面が「うつほ物語」へ展開すると説き、物語文學とのかかわりに示唆するところが多いと石川徹氏の文を持って述べている。

5. 日記に表われる笑いと諷刺

土佐日記の中で、何か諧謔的な表現を試みた本文箇所があれば必ずといってよいくらいにその後には社會諷刺のテーマに即した敘述が出て来るのである。諷刺が露骨であれば、かえって讀者の反撥不快感を招きものであり、諧謔によってやわらげられてこそ、諷刺が素直に受け入れられるものであるという文章作法を貫之は確實に把握していたようである。

12月22日の「船路なれど馬の鼻向け」をしたり、「鹽海のほとりにてあざれ」あったり、互いに概念の矛盾した言葉を組み合わせ、常識的な豫想に肩すかしをくわせるおかしみを出しているのであるが、それは恐らくは 23日の頃に國司として貫之自身の清廉實直な勤務ぶりを主張して、一般の國司が土着の有力者との間に情實関係を結んで不正利得を貪っている實態を暗示する社會諷刺への前置きとしたものと考えられる。「ふなぢなれぞむまのはなむけす」は旅行の門出に、行路の安全を祈って、ゆく人の乗馬のたずなをとって馬の鼻面を、ころごす方角に向けてやるのが「旅のはなむけ」の語源であった。古代において、馬が最も重要な交通手段であったことをものがたっている。10世紀の貫之の時代には、そのような語源とは関係なく、せん別という社交儀禮が行われていた。貫之の歸京の旅は船路であるから馬には関係がないのであるが、それをことさらに語源にまでさかのぼって「むまのはなむけ」といったのには、船旅と乗馬との矛盾のおかしみをねらう作家の意圖があったからである。こういう表現の中に諧謔的效果がうかがわれる。「ほうみのほとりにてあざれあへり」と貫之は送別の宴の一座のものが、大津の海岸で無禮講の歌を盡くしている状態を、鹽が利いていれば腐るはずのない魚肉がくさってみたれるという矛盾のおかしみにかけたところに諧謔効果を出している。従って行儀がみたれるという表現と、即の黃味などがみたれるという表現との共通点に、「みたれる」という譯語をもっとも適切なものとして選び出している。田舎の人の人情一般から言って、國司がいよいよ離任するという間際には、見送りになど来ないものたということ、都會の人情の輕薄なのに比べて、田舎の人情は純朴なものものとされている常識と矛盾する。本來人

32) 渡邊秀夫「漢文日記から日記文學へ」、日本文學協會 5月 Vo.132, 1983年, p.23.

33) 石原昭平「日記文學における『語り』の問題」、日本文學 Vol.30, 1981年, p.25.

情濃やかな地方人が、どうして國司の離任間際になって見送りに来るのを憚らねばならなかったかとその事情は何か。前國司が離任に見送りにゆくという個人の行動は常識から考えて社交的にも道徳的に當然のことであって何ら恥ずかしい行爲ではない。それを取り立てて、恥ずかしがらずにやって来たことを強調するのは、そうしたことが世間態を恥ずべき特異な行動として他人の眼には映るものであるという異常な習慣が當時の社會には一般化していたからであると考えられる。その理由を再び世話になるあてもない前任者をわざわざ見送りにゆくのはばかげた行爲であると嘲めるものが多かったからであると推論する説もあるが、それでは地方人の人情が本來輕薄なものということになって、一般的事實と矛盾する。しかも、假に地方人の一般の人情がそのように輕薄なものであると認めても、そのような一般的道徳水準よりも高く正しい行爲をすることに、何の恥じる必要があらうか。むしろ離任する國司を、いかにも名残惜しげに見送ること自體が當然恥ずべき行爲として世人の笑いと後指されるような一般的條件がそこに備っていたことを認め、そのような環境においてその恥ずべき行爲をあえて行ったところにこの人物の律儀さと、その律儀な英雄的行爲の對象となるに値した貫之の廉直さというものが一層強調されている。

八木の律儀さをあまりほめたので、それは間接には貫之自身の廉直さを主張し過ぎたことになる。と識者からきらわれ輕蔑されるのをおそれて、もらったものが良かったからほめるわけではないと、當面の話題を皮相な物質面にそらせたのである。行政、徴税、警察などの諸權力を背景として自己の個人的能力以上の大きな支配力を發揮できる官吏というものはときどきその權力を自己本来のもの信じたり、自己の私慾追求も公的行爲のように錯覺しやすいものである。平安時代においては、一國の行政、治安、徴税の權力を一手に握った國司は私利追求への誘惑が多かったと思われる。國司に任命されるか否かが中下流貴族の一家一門の重大な關心事であった。俸祿のみでは大家を養ってゆけなかった。官職について、その報酬がばくだいなものであった。しかもその官職も期限があつて、失職中の生活費も蓄えねばならなかった。また官職につくとき、有利に取りはからしてもらうためには權門勢家に贈る政治的獻金も造らねばならなかった。従つて別途収入を得るには國司の職が最適であった。國司は租税を過徴し、公金を横領しながら治安の亂れとか、莊園の増加などを口實として朝廷への貢納を怠つたりして莫大な蓄財を計るのである。

貫之の土佐在國の時代、當時は地方行政の亂れの傾向が一つの頂点に達した時であったから貫之のような純粹篤實な官吏としては苦しい思いをしたと考えられる。23日條で、國守一般の墮落を指弾しているが、二つの方面から間接的表現を取っている。一つは貫之自身が非常に貧しく儉約的生活態度をとっているという事實を主張することによって、他の一般の國守の不義の富裕を暗示する方法である。日記中「守からにやあらむ」と前國司貫之の人格をほめたのは、その表現法に従つたものである。もう一つは、一般世人が國司というものをどのような眼で見ているかということ。すなわち、國司は必ず悪事をはたらいて私腹をこやしているものとして、世人が思っているという事實を説明する方法である。日記中「國人の心の常として今はとて見えざるを心あるものは恥ぢずになむ來ける」と地方人が離任する國司と最後の別れを惜しむことに世間態を氣がねしている事實を指摘したの

がそれである。

都會の人より田舎の人の方が人情に厚いものが常識である。ところがこの日記では田舎の人の人情の常としていよいよ別れという時に姿を現わすものであるがという前提条件を出している。これは古今東西の共通の常識に背反する異常なことになる。かといって、土佐の人たちだけが薄情であるという特殊性も認められない。従って國司の離任の時、別れを惜しむことが世間態を恥ずべき行爲であるという常識が一般化していた当時の特殊事情であったと考えられるのである。さらに、心あるものはその世人の白眼をも怖れずにやって来たということは、いっそうその行爲が當時の常識に逆行するものであったことをものたっている。どうして離任する國司と別れを惜しむことが恥ずべき行爲であると思っていたのであろうか。國司というものは一般に數十人にも及ぶ一族郎等を連れて赴任する。しかし人手が多く、辣腕であっても、未知の土地へやって来ていきなり利權を左右して收奪をほしのままにすることはむずかしいのである。土地の顔役、有力者などを手を結び、法のうらをかいて甘い汁を吸うのである。それぞれの土地の實情を無視して、苛斂誅求すれば自身の破滅を早く招くのである。従って土地の顔役と國司との間には醜い情實關係が成立するのである。

こういう事情は口には出さないが世人一般の常識であった。それをいまさら國司が離任するときにお互いにお世話になりましたと人の前で、別れを惜しんで、臭い仲を世間にさらけ出すばかりはいないのである。會う時はいつも他人。これが暗黒社會の社交禮儀である。そして土地の有力者は、新任の國司と新たな契約を結ばねばならない。前任國司と別れを惜しんで、世間で札付きとなった人物を新任國司は見むきもしないだろう。もし、そんな男を近付けたらたちまち民心を失ってしまうのである。従って新舊の國司と土地の有力者とは暗暗のうちに利權情實がつづいていくわけである。そしてそのような情實關係を持たなかった一般地方民は、前國司の離任のとき下手に別れを惜しむと、世間から白眼で見られてこまることになる。一切知らぬ顔で過ごしてしまうのが一般であり、遠いところで人眼を避けて別れを惜しむのが常識であった。

このように歪められた人間關係が社會通念となっていたので普通一般常識から人情に厚い田舎の人が冷淡な態度に出る意味が納得されるのである。誤解を招くことも怖れずに、あえて離れを惜しみに来てくれた八木のやすのりという人を、心あるものとほめ、そのような崇敬者を得ていた貫之を廉直の國司として自賛する意味が認められるのである。國司一般の腐敗を諷刺するとき、そうした腐敗の事實を直接指摘することなく對照的条件として貫之自身の清貧廉直を主張する文章と國司の墮落を世間普通のことと、受け取っている一般人の習俗を指摘する文章と、表裏二面から間接的に問題を浮かび出させる方法を取っているのである。したがって國司の背任横領行爲に對する間接諷刺はいちおうここで休止して、土佐日記の終末の部分で、都會の住民が、どんな態度で國司の歸京を待ち受けているかという間接諷刺と前後照應しているのである。送る國人と迎える都會人。貫之の構想はここに首尾一貫、終始の完結を見せているのである。この日の條での諧謔効果は、一般國司の墮落とこれに接する地方人の表情をとらえ、そのうえに自己の廉直な生活ぶりを抜け目なく宣傳しながらも、一面諷刺の行き過ぎと自己宣傳の逆効果を氣にかけなのが、やはり貫之のインテリの弱さであ

ると指摘される。そこで八木のヤスノリを心よくほめるのも、せん別にもらった品物が良かったからではないと、他をかえりみて言う、てれかくしをしているのである。これもまた、鋭い諷刺を、やんわりとまわたで包む諧謔的表現で一つであると考えられる。

講師に対する異常な敬語の使用は、次の25日條に出てくる新任の國司島田に対する悪意に似た輕視の文章と表裏をなすものである。島田に対する不満は、その赴任の遅延から發しているもので、國司交替の不規律という當時一般の社會問題に發展するものであるから、社會諷刺的となる。この12月24日の條は交替事の不規律に対する批判である。臼田氏³⁴⁾は25日條で、新任の國司が自分でやって來ないで使者をよこして呼びつけるとは失禮という不満がもとで、「とかく遊ぶやうにて」と書いたのは本式の演奏でないことを皮肉っていると解釋している者もいるが、これも一の見方であるが氏はとらないと論じ、貫之はこれほどいやみの老人ではなく、また陰的な皮肉屋でもない、陽的なユーモリストであると説いている。さらに萩谷の貫之觀で、底意志の悪い皮肉家のように取り過ぎている面は同感できないときっぱり萩谷氏との見解の相違をも提示している。

12月26日では新國司に対する貫之の不満がはっきりと表面化している。大盤振舞いの送別宴を開いて郎等までに縁を與える島田の社交的態度、純粹に惜別の情を表明した島田の和歌、これに対する貫之の皮肉な返歌と酔ったまぎれのお世辭などは島田に対する悪感情を表面化したものである。こうした非禮な態度は新任國司の態度から端を發しているだけに社會諷刺の微證と見られる。

1月1日の「芋莖、荒布も齒固めもなし、かうやうのものなきになり、もとめしもおかず」と、元日といっても最下等の正月料理もなく、買い調べておかない貧しい貫之を描寫していることは國司とか地方官などの物質主義や綱紀の弛みに對する諷刺の反證である。即ち、他の國司が巨富を蓄えて歸京する當時の一般的風潮に對する痛烈な諷刺である。古橋氏³⁵⁾は「けふ都のみぞおもひやるる」と都への懷郷の想いを取り上げて次のように述べている。押鮎が話題になる前にも「いもじあらめも齒固もなし、かうやうのものなき國なり」と都との比較がなされている。都への想いは平安文學の一つの美的な主題をなしているのだが、その美的な主題に卑俗な描寫が對置されている。これはも定型的な描寫に對する皮肉である。そのように書いていた作者自身の醒めた眼を持っているからであると説いている。王朝貴族の生活の原点は、都におけるみやびと言え、都は貴族生活の現實の場であるとともに、季節の推移や年中行事などによってもたされた情趣性が和歌などによって理念的に把握されたみやびが發想される觀念の場でもある。土佐日記の旅は「ひな」の發見ではなく「都」の確認と言えよう。旅の見聞はすべて都を志向し都へ回歸している。そして一貫しているものは都への求心性と言ってよいのである。都に近づて意氣盛んとなる。都とのかわりは一元的であり、都は絶対的なものである。土佐日記の世界の基盤は常に都の内側にあり、都の外側からの視点には立てられないのである³⁶⁾。

34) 臼田甚王郎「王朝日記」(『鑑賞日本古典文學 第10巻』, 角川書店, 1977年) p. 32.

35) 古橋信孝「笑いの文學、諧謔の精神」(『國文學解釋と鑑賞2月號』, 至文堂, 1979年) p. 15.

36) 小町谷照彦「土佐日記と高光日記」(『國文學解釋と鑑賞4月號』, 至文堂, 1972年) p. 58.

1月7日大湊の條の「かくて、このあひたにことおほかり」というくたりをよんでみると、教養低く、利己的な田舎の歌天狗の話がでてくる。この人が貫之たちを訪ねてきたのは、彼らに対する誠意からではなく歌の明匠である貫之と歌を贈答することによって、自らを満足させ、また箔をつけてみようという卑しい心からであった。顔では誠意をふりかざしながら心では利己心を抱いていた、この田舎者の無神経さと無禮は都人として洗練されていた貫之の腹の蟲がおさまらなかつたのである。誠實の無いところにいい歌はでてこない。田舎者は「ゆくさきにたつしらなみの…」などと旅立つ者に對して縁起でもない、空疎で單なる誇張に過ぎないものをうたった。貫之はあきれかえて、「ずいぶん大きな聲なのでしょう。持って來た料理よりにくらべると、歌はどんなものかしら。だめだね」などと、はげしい皮肉と痛罵とが相ついででてくる。この場面は、都に育った「よきひと」と田舎の「無骨者」とを女と男との對比においてとらえ、一はその誠意とゆかしさ、一はその不實といやしさを主題として、それぞれ獨立的に書き分けるだけではなく、これら二つをこのように對照の世界に引きいれて、一つの場面として設定することは、異質を異質としてきわだたせる一つの秀れた演出法といえる。それはまた誠實を尊び不實を憎む貫之の篤實な精神の強烈な形象化にはかならないと言えよう³⁷⁾。「あをむまをおもへどかひなし」、「あをむま」とは白馬の節會³⁸⁾である。宮中では白馬の節會が行われ、若菜を摘む³⁹⁾日である。都を思う思いは切なるものであったと思われる⁴⁰⁾。節會は、1. 御弓奏、2. 宣命、3. 敍位(除目⁴¹⁾)、4. 御馬渡、5. 賜酒饌、6. 國栖奏、7. 内教坊女樂、8. 宣命、9. 賜錄、これだけ複雑な内容を持ち長時間の興行を要したのであるが、この日の主要なものは敍位(除目)である⁴²⁾。品川氏は、貫之が延喜 17年 のこの日に從五位に敍せられているから、心は京の宮廷の節會へと驅せられるがなんのこいもなかつたので、7日の記事は全體的に輕快な、活潑な文體で書いてはいるが、後末では無神経で我慢ならぬお客を非難するのに語氣鋭く、いらたしきで「これのみいたがり、ものをのみ食ひて、夜更けぬ」と對句をもってたたみかけるような言い方をしつかり氣をわるくしていると説いている⁴³⁾。

1月13日の條は、老海鼠、脂具、鮑、いずれも女の性器の象徴である。萩谷氏は老海鼠を男性、脂具を女性とする性器にたとえ、擬人的な表現でテンポの速い簡潔な文章の中に盛りこんでそこにはとん

37) 鈴木知太郎「土佐日記の構成」(「平安日記 I」, 有精堂, 1982年) p. 80.

38) 白馬の節會: 昔正月7日、朝廷で行われた儀式。馬は陽のけたもの。青は陽春の色ということからこの日、白馬を見れば年中の邪氣を除くという故事によつたもの。清涼殿の庭で白馬21頭を進め、天皇がそれを見る。後、宴をもよおす。

39) 若菜を摘む: 新年の新菜7種であつたものを作りそれを食べると万病邪氣をまぬがれるという中國の習慣にならい、日本の朝廷の儀式となつて、民間でもや日に若菜を摘むのを風習とした。7草はなずな、はこべら、せり、あおな、ごぎよう、すずしろ、ほとけのぞであると「河海抄」にのっている。

40) 池田龜鑑「土佐日記」學燈社、1982年、15刷、p. 37.

41) 除目: 前官を「除き」新官に就くことで、「目」は目録に記入する意。大臣以外の諸臣の任官の儀。清涼殿で行われ、ね申文(任官申請書)を藏人が受けとり、御前で選定、奏上する。天皇はこれを見て返される。男性貴族にとっては切實な行事であつた。

42) 萩谷朴「土佐日記全註釋」角川書店、1982年、p. 132.

43) 品川和子「土佐日記全註釋」角川書店、1982年、p. 132.

どわいせつさを感じられない非凡な筆力を見るべきであろう⁴⁴⁾と説いたのに對して、古橋氏⁴⁵⁾は露骨な描寫であることにはまちがいないと斷言している。氏はさらに、「月いともおもしろく」と情趣的描寫、海神に魅入れられるから美しい着物は着ていないというような信仰の描寫にも、性的な描寫が露骨に對置されている。いわば貴族社會の感性に對する皮肉と言える。と説き、貴族的な情趣、俗信に誰にでも通ずる卑俗な性的なことばをぶつけてみる。そこに生ずる笑いこそが、彼が狙ったものである。氣どっている連中に對してあざけわらうような態度であると述べている。

深澤氏は1月13日にでてくるいささかエロチックな記述をめぐって論じ、女性假託の文學にはふさわしくない下品な表現の典型として、否定的に捉えられることがしばしばある。だが結局言葉遊びに似た諧謔の精神を見出すことで終ってしまう。それが言葉遊びに似た諧謔表現であり滑稽表現であるのだが、非日常的な破壊的な力をそうした茶化しの表現を媒介とすることで抑えこみ、かろうじて作品の裡に採りこむという逆流現象が見られたと説いている⁴⁶⁾。

1月17日。なかなか舌鋒の鋭い非難や、痛烈な皮肉を放っている。人間を相手の場合はもとより、自分の氣にくわないと宗教的な權威に對してさえ、辛辣な批評をあげせかけている。2月5日の例の住吉の明神に向って下した批判のことばはだれでも認めている。偶然が傳説による神の貪ランさを実證するような場面を現出させるとなると、彼はすかさずそこに痛烈な非難の一矢を射こむのである。もっともそれはいわば取りはずしの形で、冗談まじりに語られているのであるが、たとえそうであるにせよ、この當時としてはおどろくべく大膽なことばが吐かれたところには、やはり因習にとらわれない自由な批判的見地が見られるのである⁴⁷⁾。歌では消えていくような表現も、文學では残る性的描寫。彼は批判の矛先をいろいろ向けている。神に對する皮肉として、住吉は住江、志草、岸の姫松などのように、都では優雅に考えているが、そんなものではなかったと皮肉っている。

2月5日の「めもいつらうつら。鏡に神のこころをこそはみつれ」と言った文體から諧謔であることがうかがわれる。都における固定した美意識にはめこまれた住吉に現實の利害で動く住吉神を對置したからである。美意識と現實とのずれがわらいをよぶのである。この皮肉は神に對するものであり、人間に對するものであった。風波で漕船の困難な状態にかじとりが、「この住吉の神は例の神ぞかし、ほしきものぞおはすらん」と捧げものをすすめるが、それを「いまめぐものか」と評している。「例の神」とは皮肉ないいかたであるが、「いまめぐものか」はかじとりのいいかたに對してというよりも、物の受け渡しによって行動する神に對しての評である。とするとこれは物品の受援によって人が行動するのが當世風たという現代的な批評であり、神も同じかという皮肉でもある。2月16日の條には皮肉、諧謔などはないが、人に對する不満の爆發とか、恨む感情が表現されている。たがそのような悔しさを人に聞かれてはまずいのである。というような態度で望んでおり、文句を言いた

44) 前掲書 p.191.

45) 前掲書 p.115.

46) 深澤徹「土佐日記、時空論」(『本文學 Vol.32』, 日本文學協會, 1983年) p.59.

47) 重友毅「土佐日記について」(『國語國文學研究史 大成5』, 三省堂, 1978年) p.81.

くてもぐっとおさえて、なおもにくい人人にお禮の金品を渡そうとしている。いじらしさが書かれている。

皮肉、諧謔をふんだんに使って人や神にまでもちやかしながら京までの気分が自分の家のありさまを見たときたん崩れていくのである。したがって彼の諧謔の精神の根據がそこに露わになっていると言える。人の心に對する不信とそれを人におつけることのできない屈折と、一方で當代一流の歌人として名のある彼は、金品などの利害でのみ動く人の心を憎んだが、それを表に現わすことはできない。そこにちやかした型で當世風に對する批判をかな日記という表現法で書きつづけた理由があったと讀みとれるのである。

彼が批判するとき根據はなんだろう。「いまめくものか」にあると思われる。當世風ではいけない。昔がよいという考え方に立っていると言えよう。土佐日記全篇には「こころ」がいたるところであられる。例をあげると「ことのこころ」、「こころをやり」、「人のこころを」、「こころある」、「こころよげな」、「こころざし」など心によって評價はふんたんに現われる。彼の心情を支えている諧謔の文體は意外にかんたんな構造をもっているのである。例えば、①船路なれど、馬のはなむけす。(12月22日)、②一文字たに知らぬ者が、足は十文字にふみてであそぶ。(12月24日)、③春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにそありける。(1月21日)と単純な構造に集約できるのである⁴⁸⁾①の「馬のはなむけ」という陸路での別れのあいさつが海路に用いられるという概念の矛盾。②の酔った者の千鳥足がふらつく、それはあたかも十文字を書いているように見えることから、一文字さえ知らない者がとかぶさる皮肉である。③の港からどっと船が出ていくさまから木の葉が散ることを連想し、春の海、秋の木の葉の散ることをぶつつける矛盾さ、つまり異なった概念、意味内容のものが衝突するとき生ずるおかしさが基本になっていると考えられる。性的描寫についても情緒的な描寫に對置される構造になっている。従って矛盾の發見が直接的に土佐日記の諧謔の文體を生み出したと言えるのである。

土佐日記はその内容が亡兒に對する悲嘆を中樞として廻轉しているものであると香川景樹によって道破れている。だが中樞を形づくるものは亡兒に對する追懷の悲嘆というよりも、あるいは人間の世の頼みがたなさや淺ましさに對する悲嘆であるといった方が適切であるかも知らないと思っている⁴⁹⁾。人間が眞面目で純粹である限り、おそらくだれでも同感するところのものであり、解釋されるところのものである。貫之は當時の人人と同じように、都が好きで、はなやかな過去もあった。また自分の家がある。一刻も早く都の土を踏みたい。都へ都への心を一杯になっていたにちがいない。喜びながら悲しみ、進みながら退き、重い気持ちと軽い気持ちと、明るいやつと暗いやつと、不思議に交錯する中で、この旅をつづけなければならなかったのである。

京へ歸りついて見れば、自分をまず迎えてくれたのは、偽の多い、冷たい荒れはてた人情であった。

48) 前掲書 p. 120.

49) 小宮豊隆「土佐日記の研究」(『國文學解釋と鑑賞4月號』、至文堂、1972年) p. 70.

自分の家は、隣人が進んで預ってやるかといっていたのに、荒れて懐れにこわれて、池のほとりに植えていた松も、枯れたのか切られたのか、影も形もないというありさまであった。改めて、人間の心の頼みがたさや、人間の世の浅ましさを身をもって痛切に味わされなければならなかったのである。この隣人の虚偽と軽薄とに憤激しないではいられなかったのである。貫之はこのときの憤りを誰かに假託してでも、腹の中に溜っていたもたもたしているものをすっかり吐き出す必要があったと思われる。重友氏は、貫之は隣人の不實に對する憤りのあまり、われを忘れてその正體をさらけ出してしまっている⁵⁰⁾。そしてこの部分を讀んで、これを貫之以外の別人が書いたと思うような者が一人でもあったらどうかと反問している。だが、津本氏⁵¹⁾は問題にならないと次のように説いている。記事も創作であること、虚構であることの可能性を示唆している。つまりこの作品は假構から、そして創作から始まっていることを證明づけての作品である。それゆえ、作品の筆は自由に展開する。基本的には架空の作者が主人公としてここに登場することになっている。あくまでも冒頭において創作として設定したのであるから作者は男性であること、つまり貫之であることがすぐ露呈しても問題にはならないと説いている。さらにその態度は實景を詳細に描寫しようなどとする意識はなく、描かれるのは土佐と都のことばかりなのである。出發してはや何日と何日と京へとはやる作者の鼓動が否應なく傳わってくるほどに作者の郷愁は旅の往復に同一コースをとったかどうかは意識の外であったかも知れない。だが假名で書く表現は晴から藝術的な世界を描くに容易となり、後宮女房たちの間でも日常會話のごとく身近にその表現法を得たことは歴史的に特筆すべきことである。貫之の手によってかな文字が堂堂に評價をうけるにいたったのであると新しい解釋を試みている。

日記は「とまれかうまれ、とくやりてむ」と終る。忘れようたつて忘れられない、心残りなことは澤山あるが、とても書き切れはしない。何はともあれ、(こんなものは人眼につかないように)早く破ってしまおう。と書いている自身の心に對して、また、何びとかこの作品をよむであろう人に對しての反省であり、弁解でもある。あれはた自分の家のようにあれはた自分の姿を見ると、さめた知識人のなげきがふと涙になって眼をかすんだであろう。自分の家の前はきれいに掃き淨めるが、よそではかまわず紙屑を投げちらす人たち、こういう日本人、いや現代人の通弊のようなもの、隣人愛とか公德心の缺如を一千年の昔に、すでに貫之は指摘し憤慨しているのである。人はあまり腹が立つと返って笑いがでてくる。土佐日記は女性假託した自體が諷刺であり、諧謔であると言えるのである。

Ⅲ. 結 論

貫之は祖先の名を辱めないように努力し、なお万人から尊敬を一身に集めるよう廉直に生きよう

50) 前掲書「土佐日記について」p. 80.

51) 津本信博「『土佐日記』はなぜ、何のために書かれたか」(『國文學2月号』、學燈社、1993年) p. 34.

と精勵した官吏であり、知性人でもあった。清貧を誇りとする彼には、不正、不良の國司や海運業者にがまんならなかったのである。すたれた人情、利己的な世人をまともな頭では見ていらなかったのである。官紀の亂れと無禮さ、そして圖圖しさ、神をかざしてのごまかしなど憤りとして腹の蟲がおさまらなかつたのである。これらを直接言うには年よりの苦情としか受け取らないだろう。罵言を吐いても口うるさい妄言としかうけとめかねない。政界に訴えてたにしても、人を中傷することになって決まりが悪くなる。さあどうしたものかと思わずらい考えあぐんた結果、誰かにばけて、女性をよそおってても、腹の中にたまっていた蟲をすっかりはき出そうと思ったに違いない。ある場面は美的な主題に卑俗な描寫で對置させて皮肉ったり、一般人の習俗を指摘して、表裏二面から間接的に問題点を浮かび出させる方法で、諷刺と笑いをかもしたりしている。

本稿で貫之という人では醒めた知性人の意識はさえていて、にごっていないとして浮ぼりにした。なお本稿の主題にそつての後學者たちのさまざまな見解をできる限り丹念に調べ、その率直な意見に耳を傾はようとした。諷刺性と社會諷刺性を引き出して浮き刻りにしてみた。終りには日記の内容を吟味しながら、そこににじみ出る諷刺と諧謔を分析し、なお諸學者の意見まで參考にして考察してみた。土佐日記を開卷すると「男もすなる日記といふものを、女もしてみむして、するなり」と一口から始められている。まさに土佐日記は女性をよそおつた自體が諧謔であり諷刺であると筆者なりに結論づけてみるのである。

〈국문초록〉

土佐日記의 풍자와 해학

- 깨어있는 지성인의 탄식 -

강 태 국

일본에 있어서 일기는 고대로부터 귀족계급 남성들이 公的儀禮등을 한문으로 기록하는 실용성이 강한 것이어서 문학성이 결핍되었었다. 일본 平安時代의 知性人 紀貫之는 관리였다. 그러나 여성으로 가장하여 가나(かな) 문자를 사용하여 土佐日記를 썼다. 이로서 日記는 문학으로 발돋움하게 되었고, 그 영향은 平安女流日記文學을 꽃피게 하였다.

土佐日記는 主題가 다양하다. 그 중에서도 日本 古典文學 學者들간에선 대체로 歌論性을 제1 主題로 삼고 제2주제를 社會諷刺, 제3을 自己返照로 삼고 있다. 필자는 「어째서 女性假託으로 했는가」(제주대학교 논문집 제18집)에서 제3주제를 고찰한 바 있었다. 제2주제인 歌論性에 대해서는 2차에 걸쳐 「和魂漢才을 中心으로」(제주대학교 논문집 제27집)과 「句題和歌을 中心으로」(제주대학교 논문집 제30집)에서 이미 고찰한 바 있다.

본고는 제2주제인 사회풍자에 걸들여 그 해학성 마저 고찰해 봤다.

우선 作者 貫之는 어떤 사람이기에 자기가 쓴 것을 여성이 쓴 것처럼 해야 되었는가, 그 사람의 입장을 정립해 봤다. 뇌물이 횡행하는 당시, 그런 것들을 무시하고 청빈을 금지로 삼는 의식이 깨어있는 지식인임을 부각할 수 있었다.

나아가 후학자들의 눈을 통해서, 그의 작품에 나타난 사회풍자와 해학성을 어떻게 받아들이고 또 평가하고, 어떤 시각으로 다가서고 있는가를 알아보는 과정에서 슬픔과 기쁨이 교차되는 풍자를 통해서 경세의 깊은 뜻을 표현하고 있음을 알 수가 있었다. 따라서 후학자들 의견을 경청하면서, 필자 나름대로 해학성과 사회풍자성을 따로따로 비중있게 다루어 보았다. 끝으로 일기의 내용을 재음미해 보는 방법으로 깊이 있게 분석 고찰을 시도해 보았다.